

シンポジウム

# 大学生の心身の健康問題に対処しうる 大学体育を目指して

シンポジスト： 根上 優（宮崎大学）

「自己実現を促す体育授業モデルの構築をめざして」

飯干 明（鹿児島大学）

「全生活型体育」の実践をめざした体育・健康科学理論」

柿山哲治（活水女子大学）

「健康スポーツ実技における授業記録の導入と個別指導の試み」

コメンテーター： 森 正明（中央大学）

コーディネーター：橋本公雄（九州大学）



## テーマ設定の理由

九州地区大学体育連合では、平成16年度に大学生の心身の健康問題に対処するため、独創的体育プログラムの開発に着手し、15、6名からなる大学体育授業研究プロジェクトを設立した。このプロジェクト班で、平成17年度（基盤研究（C）、（企画調査））、および平成18・19年度（基盤研究（B）、（一般））の文部科学省の大型科研費を獲得し、現在精力的に研究を進めている。本シンポジウムでは、この3年間の研究成果の一部を、理論、講義、実技の3つの側面から報告し、シンポジウムを開催することを企画した。

シンポジストの根上 優先生（宮崎大学）は「自己成長を促す体育授業モデルの構築を目指して」と題して、九州地区大学体育連合を

九州大学 橋本公雄

構築した授業内容の構成要素としての「三元論的・相互干渉モデル」について問題提起を行った。また飯干 明先生（鹿児島大学）は「全生活型体育」の実践をめざした体育・健康科学理論」と題して、金原 勇氏(2005)が提唱する「全生活型体育」を展開した講義の内容とその効果について話題を提供し、柿山哲治先生（活水女子大学）は「健康スポーツ実技における授業記録の導入と個別指導の試み」と題して、実技におけるユニークな授業内容と成果を紹介した。最後に、森 正明（中央大学）先生にコメンテーターとしてのご意見を頂き、討論に入った。

以下、発表者の要旨を掲載する。



# 自己実現を促す体育授業モデルの構築をめざして

宮崎大学 根上 優

## 1. 「魅力ある授業」と「価値ある授業」の背反する関係性

本シンポジウムでは「自己成長を促す体育授業モデルの構築」を目指して「体育授業の三元論的・相互干渉モデル」なるものを提示したが、その直接の契機となったのが、平成11年に九州地区大学体育連合の春期研修会を「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」と名称を変え、従来の「実技講習」中心の研修から「教育と研究の融合」という理念の下での「魅力ある授業づくり」へと活動の目標をシフトしたことにある。

さて「教育と研究の融合」という理念は、学問的に体系化された＜知＞を「教授すべき価値」（「価値ある授業」）として教育実践に反映させたいという我々の願いから発したものであるが、皮肉にもこれは（教師にとっての）「価値ある授業」と（学生にとっての）「魅力ある授業」が背反する関係にあることを浮き彫りにした。結局、我々は、このような矛盾を方法論的に止揚し、学生の授業への「主体性」を引き出すために、「魅力」と「価値」の干渉点にあって「学ばせたいこと」（妙薬）を「笑い」（オブラート）に包んで「学ばせる」（飲ませる）「おもしろくて、ためになる」授業づくり－「魅力」と「価値」を兼備した授業－に努めることになる。

## 2. 自己成長を促す授業モデル構築の必要性－第三項としての「挑戦・冒險のある授業」

このように「魅力」と「価値」を兼備した授業



は、確かに学生の主体的な授業参加を促し、学問的＜知＞の社会化を図るという課題を一部解決することができたが、一方で、そこに「悪しき決定論的思考」－「体力を授業の目的にしてはならない」「無理をしない」「頑張らない」といったイデオロギー的言説が滑り込むのを阻止することができず、しかも現代の都市的学校環境にあっては、根本的に「日常的惰性」や「人間中心主義」の思想を免れず、「自己成長」のために必要な「真の自己」（real self）発見の契機を得られなかつたのである。

ここに、人間中心主義の思想からの脱却と惰性化した授業の蘇生のために、日常生活世界の安定した構造の「外部」すなわち「エッジ」（edge）へと飛び出し、これまで「魅力ある授業」も「価値ある授業」も排除してきたリスク（risk）やストレス（stress）といった「不安定」な環境要因に身を晒すことによって、そこに「真の自己」を発見し、劇的に自己実現・自己成長を図るとともに、人間による「自然の支配」に限りがあることや、「動物としての人間」（「動物としてのヒト」）についても身を以て知る「エコロジカルな授業モデル」を

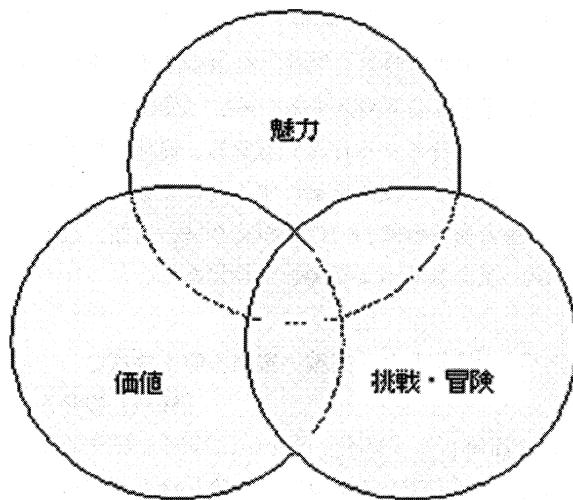


図1 授業の三元論的・相互干渉モデル

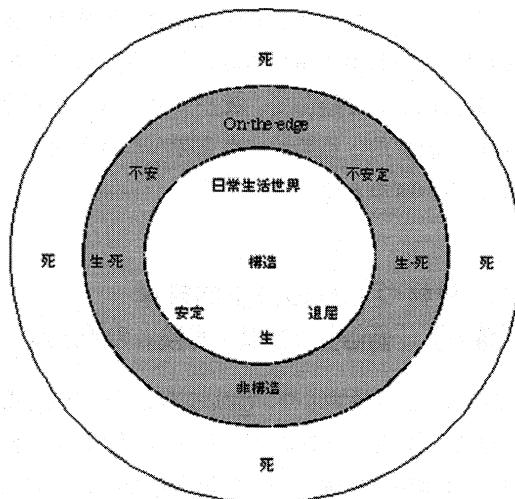


図2 エッジワークとしての挑戦・冒険の世界

「第三の対立軸」(「挑戦・冒険のある授業」として創出する所以がある。(上・図1参照)

### 3. エッジワーク(edgework)としての挑戦・冒険の世界

このような「エコロジカルな授業モデル」の創出にヒントを与えたのが、Lyng, S.(1990)の考案した概念「エッジワーク」(1990)である。彼によれば、エッジワークとは「自らリスクを冒す行動」(voluntary risk taking)のことを指す。「挑戦」や「冒険」(adventure)といった行為が、こうした活動に該当するが、それは「認識の経験」すなわち「人間の認識と能力の限界を極めることに魅せられている根源的な活動」である。そこは、死やケガ、恐怖、不安、痛み、苦しみ、辛さ、等々の日常生活世界では意味を持たないもの、排除されているものが意味を持つ世界である。さらに、安定した強固な構造を持つ日常生活世界とは異なり、構造を持たない世界、すなわち非構造の世界である。人は自ら、そうした不安定に身を企投し、そして「試練」の秤にかけることによって「生きる

こと」への主体性を試し、そこに作田啓一(1993)やTurner, R. H.(1976)のいう「真の自己」を発見する契機を得るのである。(図2参照)

九州地区体育連合は、平成17年度の科研費プロジェクト「大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラムの開発に関する企画調査」(基盤研究C)において実施した全国的な質問紙調査で、多くの大学教員が実施してみたい独創的な授業の一つとして「海・山における自然体験」を挙げていたが、このような「挑戦」や「冒険のある授業」を実施するときに前提として考慮しなければならないのが、「素材」として用いられる挑戦的・冒険的なスポーツは「ハイリスク・スポーツ」それ自体ではなく、「教材」として一定の教育的目的と意味を与えられたリスク、すなわち「価値的に制御されたリスク」を装置として仕掛けられたスポーツであるということだ。その意味で、教師は、教材としての「挑戦」や「冒険」が時代と社会の道徳的・倫理的規範(どこまで死やケガのリスクを伴う可能性がある「挑戦」や「冒険」の行為が許されるのか)と絶えず緊張関係にある

ことと、こうした行為が時代と社会の道徳的・倫理的規範を映し出す鏡であること、さらには、絶えざる自己反省を通じて、死やケガのリスクがそれ自体、教育的・価値的に有意味な教材となることを知らねばならないのである。

#### 4. 教材づくりの方法的規準

##### 「魅力」「価値」「挑戦・冒険」の干渉点

このように「挑戦」や「冒険のある授業」を「第三項」として設定することによって「魅力」と「価値」と「挑戦・冒険」の3要素からなる三元論的・相互干渉モデルを構築し、教材づくりに当たっての方法的規準を例示したい。

###### 1) 「魅力」と「価値」の干渉点と

###### 「挑戦・冒険」の介入

「魅力」と「価値」は互いに反発する関係にあり、教師は両者を結びつけるために「呪術性」と「機能性」を備えた「おもしろくて、ためになる」教材の開発と、「価値ある教材」を「笑い」で包む教授法の工夫に努めなくてはならない。しかし結局のところ「おもしろくて、ためになる」教材・指導法は、教師と学生の妥協の産物（「互いに無理をしない」という新たな価値を再生産する）であり、「授業への主体的な参加」「ありのままの自己発見」という点では、依然として課題が残る。ここに「主体性」を試し、「眞の自己」の発見を促す方法として「未知なる世界への冒険」（「自らリスクを冒すこと」）の存在意義がある。

###### 2) 「魅力」と「挑戦・冒険」の干渉点と

###### 「価値」の介入

「魅力」と「冒険」は互いに最も結び合う親和的関係にある。「未知なる世界への冒険」は「リスク」を含むがゆえに逆に、それ自体、学生にとって「魅力的なもの」となるが、こうした行為は

絶えず、個人の「主体性」と「アイデンティティ」を脅かす可能性と、時代と社会の道徳・倫理・法にも抵触する恐れがあるため、「価値」は、授業において許される行為の道徳的・倫理的標準と限界を表示する役割を果たすことになる。しかし、「魅力ある冒険」の授業づくりは、当面、最も研究・工夫さるべき授業モデルである。

###### 3) 「価値」と「挑戦・冒険」の干渉点と

###### 「魅力」の介入

「価値」と「冒険」は互いに抑制し合う関係にある。「未知なる世界への冒険」は、「価値」の孕む「日常性への埋没」を抑止し、また「価値」は「冒険」の孕む「危険」を抑制しようする。しかし、個人の「自己発見」を促す「未知なる世界への冒険」は、しばしば時代と社会の状況によって「価値ある行為」として称賛される一方で、時に学生の「主体性」と「アイデンティティ」を脅かすがゆえに、必ずしも個人にとっては「魅力的なもの」になるとは限らない。「魅力」は、こうした社会と個人の意識の乖離と矛盾を映し出すものであり、「価値ある冒険」は理論的に教材づくりの難しい構成であるが、「魅力ある冒険」と並んで工夫さるべき授業モデルである。

本シンポジウムでは「魅力」と「価値」に「挑戦・冒険」の要素を加え、それらを相互干渉させることによって、全体として調和の取れた現実的な授業モデル構築のための方法的規準を示すに止まつたが、今後、これら的方法的規準に準拠して時代と社会の求める現実的な教材の開発に向かいたいと考えている。

# 「全生活型体育」の実践をめざした体育・健康科学理論

鹿児島大学 飯干 明

大学生の体力低下は、かなり以前から指摘されていたが、最近では背筋力の低下が著しいだけでなく、日常生活でよく使うことから高齢者でも低下しにくいといわれている握力までも低下傾向にある（飯干ら、2006）。このように大学生の体力が低下してくると、姿勢や日常生活にも影響を及ぼすと考えられるので、各種の身体活動を積極的に実践し体を育てていくことが望まれる。しかしながら、大学生の場合、何となく機会がない、身近に場所がない、アルバイトで忙しい、などの理由で、定期的に運動を実施する学生は少ないようである（飯干ら、2003）。

このように、運動したいと思っているが積極的な実施にいたらない大学生（運動潜在群）に積極的に身体活動を実施させるためには、大学において必修科目として位置づけられている体育・健康科学理論などの授業で、日常生活における身体活動（生活運動）を工夫して行うことについて講義することが効果的とみられる。また、運動を行うことは、脳の記憶に関係する部位として知られている海馬の一部に、大人になっても新しい神経細胞を誕生させる効果があると報告されているが、様々な働きをする脳には、運動の行い方を創意工夫したり、書物から情報を得るなどして、様々な刺激を与えることも必要であろう。したがって、精神活動についても講義でふれておくことが望ましいとみられる。その他にも、大学生では、栄養や休養に問題があることが多いとみられることから、栄養や休養の合理的なとり方についても講義で取り扱うことが望まれよう。さらに、生体リズムに関与するホルモンであるメラトニンや精神の



安定に関与するホルモンであるセロトニンなどを分泌させるためには、光を浴びることが効果的であると報告されていることをもとにすると、日光や空気などの環境刺激についても講義で取り扱うことが効果的であろう。

このようにみると、体育にとっては、日々の生活全体を充実して過ごしていくこと、すなわち、金原（2005）の提唱している「全生活型体育」が鍵になると考えられる。これらのことから、必修科目である体育・健康科学理論において、「全生活型体育」をどのように実践していくべきのか、5つの体育手段（身体活動、精神活動、栄養、休養、環境刺激）に着目して講義するとともに、身体活動では、自分の日常生活における身体活動をどのように工夫するのか課題を与えた。また、栄養や休養については、各自の現状を分析させ問題点を指摘させるなどの課題も与えた。そのような「全生活型体育」の実践をめざした講義について、授業の前後で5つの体育手段の行動変容を調査し検討したので、報告する。

## 1. 対象および調査方法

対象は、平成18年度前期に本学で開講された「体育・健康科学理論A」の中で、筆者が担当したクラスを受講した1年生108名(男子68名・女子40名)であり、初回の授業において講義の概要を説明した後、調査票を配布して5つの体育手段に対する受講前の行動変容段階を調べた。そして、最後の授業において、再度調査票により、5つの体育手段に対する受講後の行動変容段階を調査するとともに、運動セルフ・エフィカシー(岡、2002)を調査し、運動行動の変容段階との関係を検討した。

5つの体育手段について調査した行動変容の項目は「身体活動」の場合、日常生活に伴う身体活動である『生活運動』と『体育運動』とに大別した。そして『生活運動』は「姿勢」と「歩行など」とし、『体育運動』は「スポーツ」と「トレーニ

ング」にした。

体育手段としての「精神活動」の調査項目は、『運動時の精神活動』『健康状態についての関心』『読書について』『新たなことへの取り組み』とし、「栄養」の調査項目は、『栄養のとり方』(「質のとり方」、「量のとりかた」と『食べ方』(「朝食のとり方」、「良く噛むこと」)であった。さらに「休養」の調査項目は、『生活リズム』『睡眠』(「時間」、「時間帯」と『積極的休息(趣味など)』であった。また「環境刺激」の調査項目は、『自然環境刺激』(「日光の活用」、「植物に親しむ」と『人工環境刺激』(「入浴」、「マッサージ」)であった。

## 2. 結果と考察

図1と2は、受講前後における対象者全体の身体活動の行動変容段階を示したものである。受講

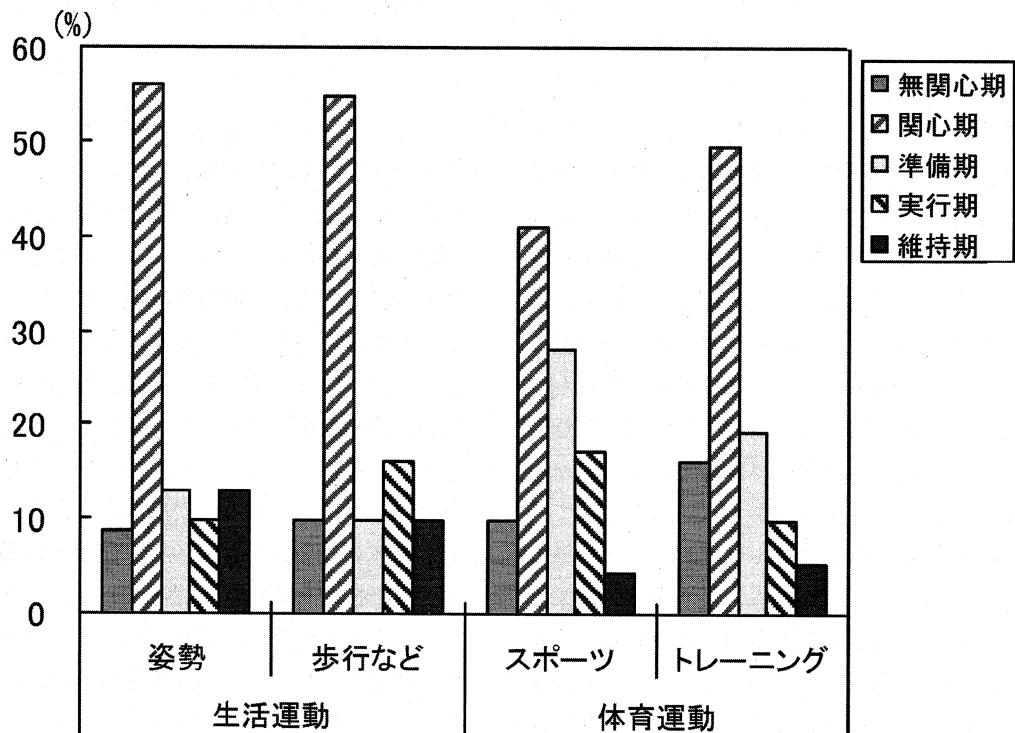


図1 受講前の身体活動の行動変容段階 (全体)

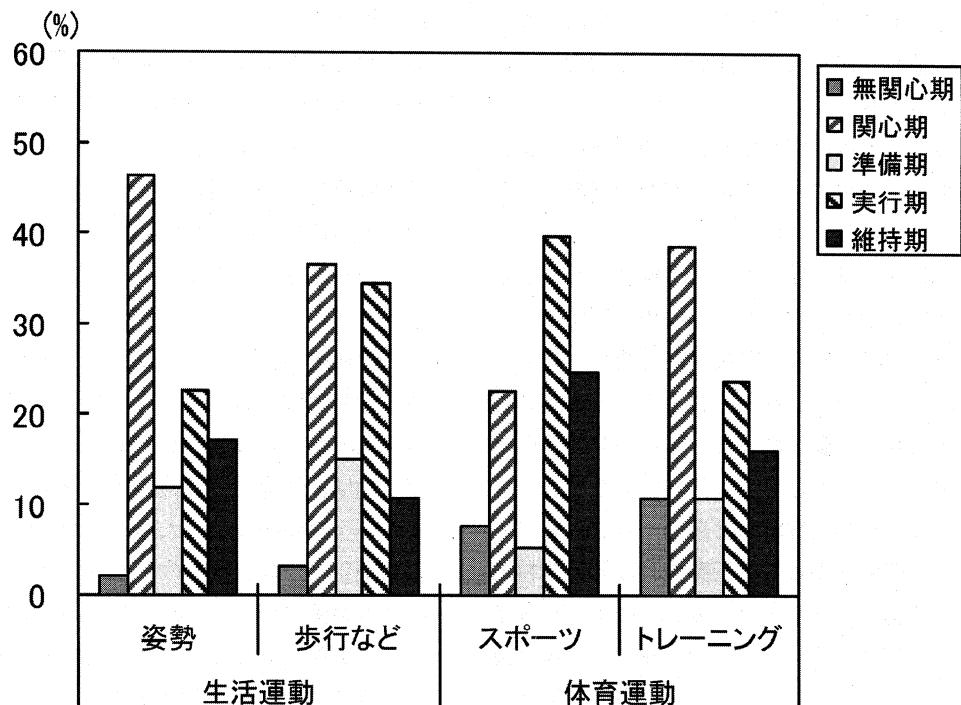


図2 受講後の身体活動の行動変容段階（全体）

前には関心期が多い傾向にあったが、受講後ではいずれの身体活動においても維持期と実行期が増えており、維持期と実行期をあわせた後期段階でみると「スポーツ」が64.5%で最も多く、次いで「歩行など」(45.2%)であった。また「姿勢」と「トレーニング」の後期段階は、いずれも39.8%であった。このように、いずれの身体活動でも受講後に後期段階の比率が高い傾向にあったのは、本研究では定期的な運動について、先行研究でなされている時間や頻度の制限を設定しなかったことが影響していると推察される。なお、男女別にみても全体とほぼ同様の傾向がみられたが、特に男子では「トレーニング」の後期段階が、女子では「歩行など」の後期段階がそれぞれ多い傾向にあった。

図3は、受講前に実行期か維持期であった身体活動を受講生全体について示したものである。図中の凡例にある「複合」とは、生活運動、スporte

ツ、トレーニングのいずれにおいても、実行期か維持期であったことを意味する。受講前では「姿勢」や「歩行など」の『生活運動』が最も多く、次いで「複合」が多い傾向にあった。男女別にみても『生活運動』が多い傾向にあり、その傾向は女子で顕著であった。これらの結果は、大学生に

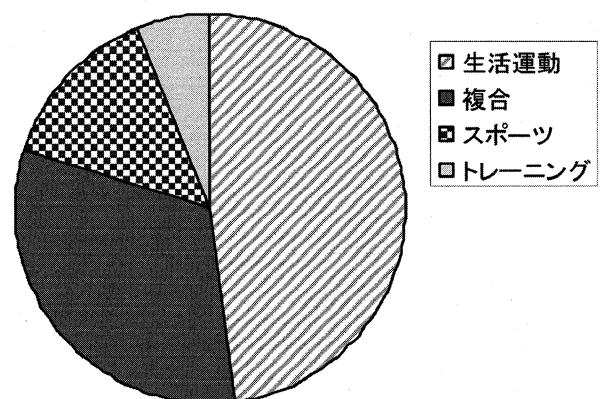


図3 受講前に実行期か維持期であった身体活動(全体)

とて「姿勢」や「歩行など」の日常生活における身体活動が、取り組みやすいことを示唆していると考えられる。

図4は、受講後に実行期か維持期であった身体活動を受講生全体について示したものである。受講後には生活運動、スポーツ、トレーニングのいずれも実行期か維持期であった「複合」が、受講前の約2倍程度まで増加し全体の約7割を占めていた。男女別にみても、受講後に「複合」が多くなる傾向にあった。これらの結果から、講義において様々な身体活動を紹介で、学生の身体活動への取り組みが、より豊かになると考えられる。

身体活動の行動変容段階と運動セルフ・エフィカシーとの関係をみると、行動変容段階の維持期における運動セルフ・エフィカシーの平均得点は、「スポーツ」や「トレーニング」などの『体育運動』の場合19.5点と高い傾向にあったが、「姿勢」や「歩行など」の『生活運動』では16.8点とやや

低い傾向にあった。さらに、10点以下の得点が占める割合をみると、生活運動の方が体育運動よりも多い傾向(16.7%vs4.0%)にあった。これらの結果は「スポーツ」や「トレーニング」などの『体育運動』に比べると「姿勢」や「歩行」などの『生活運動』の方が取り組みやすいことを示唆していると考えられる。

その他の体育手段である、精神活動、栄養、休養、環境刺激においても実行期や維持期が増加する調査項目がみられたが「朝食をとる」や「入浴」などでは、受講後の維持期が減少傾向にあった。このような傾向は、一人暮らしが原因とみられることから、今後、学生のライフスタイルと行動変容との関係についても検討していく必要があろう。それにより、講義を通した個人の生き方に即する全生活型体育の実践が可能になると考えられる。

# 健康スポーツ実技における授業記録の導入と個別指導の試み

活水女子大学 柿山 哲治

本学に奉職(2004年)して以来、教授法を身に付けるために、九州地区大学体育連合の春期研修会や全国大学体育連合の夏期中央研修会に積極的に参加し、研鑽するとともに、女子学生の現状やニーズを把握するため、健康スポーツ実技の授業の中で形態および体力の測定や健康および運動意識の調査を継続的に実施し、授業に反映させている。しかし、自身の授業が必ずしも満足いくものではなく、独自の教授法の確立を目指して試行錯誤している状況であった。幸い、2005年より、九州大学健康科学センターの橋本公雄教授を研究代表者とする九州地区大学体育連合理事メンバーで構成された文部科学省の科研費による「大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」に参画することができ、自身の授業のあり方を見直し、大きく改善を図る機会を得た。つまり「学生が満足する授業形態」から「教員も満足できる授業形態」への転換である。

そこで本シンポジウムでは、学生が毎回受講目標を持ちその成果を求めて臨める工夫と、教員の指導手法に活用できる「授業記録用紙」を開発し、健康スポーツ実技の「バラエティスポーツ」の受講者を対象に適用した事例をとおして、そこから得られた成果について紹介する。

## 1. 「バラエティスポーツ」

### 実技授業の内容とねらい

本学では、健康スポーツ実技を1年後期と2年前期に、2単位必修として全学開講している。グラウンド施設がないため、授業は体育館内に限られるものの、バスケットボール2面取れるフロア、



卓球台12台を設置できる卓球場、トレーニング室が完備されている。そこで、様々なスポーツ種目を取り上げ、各種目を1~3回ずつ行う「バラエティスポーツ」の実技を実施している。この授業では、

- ①自分の体力を知るために体力測定と評価を行う
  - ②自宅でできる運動を身に付けるために毎回ストレッチング体操を行い補強運動を取り入れる
  - ③馴染みの種目を再認識するためにバドミントン、ソフトバレーボール、卓球を行う
  - ④新たな種目にチャレンジするために風船バレー、ゴルフ、フライングディスクを行う
  - ⑤歴史、ルール、マナー、審判法に触れながら種目ごとの特徴を理解させる
- という5つの要素を通してスポーツの持つ魅力や価値を体感させることを目的としている。

## 2. バラエティスポーツにおける 独創的な試み

### 1) 授業記録用紙

「授業記録用紙」は、最厚口の色用紙にクラス

別に色分けし、両面印刷で作成されている。授業記録を毎回全員に鉛筆とともに配布し、授業初回に小・中・高でのスポーツ歴、・受講目標、・基礎体力（新スポーツテストの得点、総合評価、体力年齢）を記入させ、毎回の授業で体調（◎：良好、○普通、△やや不良、×不良）、・目標設定、・コミュニケーションリスト（一緒に行動した友達の氏名）、・種目毎に設定されたスキルテストの合否、・授業の振り返り（からだの気づき、感想、質問、要望）、・身体活動充足度（◎：過度、○：適度、△：やや不足、×：かなり不足）等々を記入させ、最終回に受講の成果を記録させた。

## 2) 授業内容の工夫

- ①各種目の歴史やルールを理解するため、写真や資料を準備して授業中に掲示・配布する。
- ②家庭でもできる補強運動（ザザエさん体操、貯筋体操、骨々体操、便秘体操、バランスボール）を紹介する。
- ③体力測定を行い、種目毎の最高記録保持者（活動レコード）は記録とともに記録樹立年月日を掲示し、新体力テスト総合得点上位10名（体力番付）は番号入りのゼッケンを着用して写真を撮影し、半期間体育館入り口に掲示する。
- ④障害者スポーツ（風船バレー、フライングディスク）を体験し、障害者スポーツへの理解を深めさせる。
- ⑤種目毎に基本スキルテストを設定し、授業毎にスキルテストを行って、その合否を授業記録用紙に記入する。
- ⑥コミュニケーション能力を高めるため、授業中にペアやチームメイトになった者の名前をフルネームで授業記録に記入する。

## 3. バラエティスポーツの時間配分

おおよそ以下の時間配分で行うように心がけ、毎回ゲームを取り入れるようにした。

### ・導入（10分間）

授業内容の説明、体調チェック、受講目標の設定、スポーツの起源、前回振り返りの紹介。

### ・準備運動・補強運動（15分間）

毎回同じ内容のストレッチング体操を行う。

### ・基礎練習（20分間）

各種目ごとに基本技術の練習を行う。

### ・スキルテスト（10分間）

各種目ごとに基本技術のテストを設定し、制限時間内で毎回行う。

### ・ゲーム（25分間）

チーム編成、ルール・審判法の説明、ゲームの実施。

### ・まとめ（10分間）

コミュニケーションリスト、受講目標に対する達成度・感想・要望、身体活動充足度の記入。成績発表。次回授業の予告。

## 4. 授業記録表による モニタリングの成果

### 1) コミュニケーションリスト

学生のコミュニケーション能力を高める目的で、授業中にコミュニケーションの取れた者の名前をフルネームで書かせると、各クラス40名前後で構成されている中で、コミュニケーションリストに記入された人数は平均21.2名であった。また、記述欄には「授業を通して新しい友達ができる喜びや友情が深まったといった」といったコメントも見られた。

### 2) スキルテスト

種目ごとのスキルテストの合格率を算出すると、ほとんどのテスト種目で7割以上の者が合格していた。しかし、ゴルフやソフトバーボールのチームで50回連続パスをつなぐ項目では合格率が低かった。ゴルフに関しては時間数が2コマ分であるため、基本スキルを身に付けさせるためには、

授業回数を増やす必要があると思われた。

### 3) 授業毎の目標と成果

授業毎の目標と成果を記載させ、内容を検討した。授業中に気づくことはできないが、授業記録を読み返すことで、学生の授業への取り組みや達成度を把握することができ、授業記録に教員サイドのコメントを書くことで、個別指導の一部を補うことが可能となった。

### 4) 受講の成果

受講の成果に書かれた文章を分析した。こちらのねらいを達成できた意見も数多く見られると同時に、授業時間内では把握できない学生の心情や要望を読み取ることができた。しかしながら、必ずしも成果が得られたというコメントばかりではなかったため、成果が得られなかった学生についての対応についても今後対処法を考える必要がある。

### 5) 授業記録から得られた語録とキーワード

授業記録における受講の成果の中から、学生にとって魅力ある授業と思えた語録、教員にとって価値ある授業と思えた語録、授業を通して学生に芽生えた意識や行動を整理すると、エンジョイ、コミュニケーションの広がりや深まり、体力変容、意識改善、新たなスポーツ種目への興味関心の向上、授業に対する前向きな取り組み、ストレス解消、基本スキルの習得やスキルアップ、運動行動の改善といったキーワードが抽出され、健康スポーツ実技を大学の教養教育で行う魅力と価値が、これらのキーワードで説明できる可能性が示唆された。

## 5. まとめ

授業記録を振り返って、以下のことが明らかとなつた。

①授業毎に学生の体調、目標達成度、身体活動充足度、コミュニケーションの広がり、基本スキ

ルの習得度を個別に知ることができた。

- ②授業記録にコメントを記入することにより、授業以外で学生とのコミュニケーションと個別指導が可能になった。
- ③個人の感想や意見を集約することにより全体指導での指示がスムーズになった。
- ④授業内容の進度確認や修正・補足が学生のニーズに応じて可能となった。
- ⑤筆者にとって授業終了後の充実感と達成感が増大した。

## 6. 今後の課題

男子学生と比較して女子学生は授業記録に素直に応じる傾向がある。本学は女子学生のみを対象にしているため、男子学生についても授業記録の有効性について検討する必要がある。また、授業記録をより活用するためには、授業記録が学生の評価に直結する内容で整備する必要があり、今後、客観的評価基準を学生に明示できる工夫をしたい。

### ●授業記録用紙の導入によるメリットとして、下記のことが指摘できる。

- ・学生の出席状況や毎回の取り組みを客観的に把握できるようになった。
- ・学生の授業に対する姿勢や態度、意見や感想が把握しやすくなった。
- ・学生の体調、授業を通じた知人の広がり、基本技術の習得、身体活動の充足度が客観的かつ迅速に把握できるようになった。
- ・学生の理解度や達成度に応じて授業内容を改変することができるようになった。

### ●しかし下記の点が今後の課題として挙げられる。

- ・授業記録の意義を学生に認識させ、授業時間に記入する時間うまく配分することが肝要である。
- ・授業記録用紙に書かれた内容のチェックは授業時間では不可能なため、授業時間以外にそのため

の時間を設ける必要がある。

- ・学生の意見や反応を考慮して、記録用紙の内容や形式を改善する必要がある。
  - ・授業記録の導入が学生自身の受講態度にどのように影響を与えるか調査する。

以上の3名の先生の報告を受けて、森先生がコメントをし、ディスカッションに入った。討議するための十分な時間が残されていなかったが、フロアからの活発な質問もあり、充実したシンポジウムとなった。全国から集まられた先生方にも九州での取り組みは幾分インパクトがあったのでは

うな影響を及ぼしているかを検討する必要がある。

- ・本対象は女子学生に限られるため、男子学生の場合についても検討する余地がある。

なかつたか推察する。今後、大学体育FD研究プロジェクト班では、本シンポジウムで提案した三元論的・相互干渉モデルに基づく授業プログラムづくりとその効果検証を行う研究に取り組んでいくことにしている。